

祭宴開催を名乗る者とは

——現代カピット・イバン社会の平等主義にもとづく競争性——

長谷川 悟郎*

本稿では、平等主義に基づくと定説化されながらも高度に競争主義的であるとのべられてきたサラワク・イバン社会において、人びとがステータスを追求するゆえにじつは序列的不平等が生じているといった現実的側面を、私が今回実施したフィールドワークの報告というかたちで簡単にのべたい。

私の研究関心の1つは、染織活動をめぐるイバン女性の社会ステータスにあり、今回の調査はカピット・バレー川流域において、染織布の制作および利用の状況について現状を把握することであった。イバンの染織布は「イバンの女なら誰でもつくれる」ものとイバンによって語られ、とくに1980～90年代のカピットのロングハウス社会における女性の伝統的威信活動として機織りはひろくおこなわれていた[Gavin 2003]。しかし私が初めてサラワクを訪問した2001年以来、今回の訪問ではゴムの流通価格がもっとも高騰しており、ロングハウス社会の多くの女性たちは機織りよりもむしろゴム採取の方に日々時間を割く傾向にあった。そのような状況のもと、機織りはほとんど放置されていたため、制作にかんする実態調査はほとんど出来なかった。しかしこういった彼・彼女らの日常生活を基本とする手工芸活動の取り組みを理解することは重要である。以下では、染織活動を狭義にとらえることなく、そのローカルな地域社会をめぐる文化的営為の社会相関性をさぐるために、社会の動向および利用の場と

してのイバン伝統の祭宴開催に焦点をあてながらカピット社会をひろく概観してみたい。具体的な研究内容は以下のとおりである。

渡航調査期間:2007年12月21日～2008

年3月15日((財)アジア研究協会2007年度「研究者育成奨学金」によって実施)

調査法:イバン人のロングハウスにて滞在参与観察

滞在地:カピット管区カピット県バレー流域の2つのロングハウス。カピット県区はおよそ関東平野とおなじ面積をもち、人口は98,000人、そのうちイバンは67.4%を占める。

ロングハウスは以下の2つである

①バレー川最下流部(カピット町近郊)のロングハウス(12/27～29泊)

労働階級層(*anembiak*)のイバン・ロングハウス。カピット町バザーからおよそ10km、乗り合いバンにて約20分。

②バレー上流部のロングハウス(1/31～32泊)

サラワク・イバンの初代最高首長(*temenggong*)である Temenggong Koh の出自村として、今日でも政治・ビジネス分野に多くの人材を輩出し「伝統エリート村」とよばれる。バザーからおよそ90km、高速船で3時間半。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程

さらに機織りとゴム採取の関連性についてのべると、私が 2003 年からこれまで数度訪問し世話をいただいていた上述②のロングハウスでは、ゴム採取はほとんどおこなわれていないが、今回見るかぎりでは手工芸品制作はかつて以前と比べてあまり見られなくなった。その要因のひとつには、住民の多くがカピット町へ居を構えるようになったことがあげられるだろう。私がかつて初めて訪問して以来滞在させていただいている家族も最近町に一戸建ての家を建てた。トゥアイ・ルマー(ロングハウス長)である主人はロングハウス近所の木材伐採キャンプにて現場監督として働き、毎日自家用の船外モーター付小舟(ロングボート)で通勤しているために長期にわたって離れることはできないが、織り手である夫人は 1 ヶ月のうちほぼ半月を町の家で過ごし、往々にしてロングハウスと町を行き来する。通常町の家は、3 世代数家族といった大所帯で暮らすことから、ロングハウスと比較して居住空間は圧倒的にせまく、機織りをおこなうに適した環境とはいえない。

このような点をふまえれば、手工芸品制作活動が見られなくなった要因を、一概にゴム価格の高騰によるものとは言いきれるものではないこともわかる。ちなみに、今日カピット町における華人商店へのゴムシートの引渡し価格は 1 キロあたり RM5.6~6.0(およそ 185~198 円)であり、一日に RM50(1,650 円)を稼ぐことも可能という。この金額は、農耕をいとなむ女性が町内の市場で野菜を 1 日販売して稼ぐ最大レベルの額であり、また男性がカピット町内で乗り合いバンの運行により月 RM1,000 を売上げるといった、非常に高い収益レベルに匹敵するものといえる。また農作

物の商業栽培では一般的なコンショウの取引値は 1 キロあたり RM8(およそ 265 円)とゴムよりも高値で稼ぎ高も良いといわれるが、しかしほかの野菜栽培とも同様に多くの肥料や農薬を要することから、ゴムから得る利益は非常に高いものという。ところで私がかつてサラワクに滞在していた 2003~2004 年時では、ゴムの値段はきわめて低く、採取するのはよほどの貧民でしかないとカピットのイバンは語っていた。

バレー流域の住民がカピット町へ赴くのは、高速船の乗船代が掛かることから、それまではおもに行政の補助金や出稼ぎの家族の送金を銀行で引き出す月末くらいであった。しかしこのように町を頻繁に往来し、しかも家を持つようになったのはきわめて最近のことだといえる。なぜこのようになったか問うたところ

1. 家を借りれば月 300 リンギット(およそ 10,000 円)が掛かるため、むしろ買ったほうが安い、
2. 子どもが町の中学校へ入り(小学校はそれぞれ村落地域に散在するが、中学・高校は町内のみ)、休暇期には面倒をみなければならぬため、町内に住むのが便利、
3. 両親が老齢にて病院通いを強いられ、町に住むのが便利、

などといった説明がなされた。端的には、よりよい生活のためであると説明される。カピット中の多くのロングハウス住人がほぼ同じような理由から町内をベースにした生活居住をするが、けっしてロングハウスを捨てて離村するわけではない。これはなぜなら、土地や家財をそこに残し、休暇期には家族があつまる家ともされているからである。たんに向都移住のために村を捨てるのではない。

また興味ぶかいのは、かつてイバン・ロングハウス社会では、伝統的に米づくりに長けた者は '*tau padi*' (米を知る者) とのきわめて高位の社会的ステータスをもって見なされ、米づくりに長けることを伝統的な美德としたが、こういった町居住が近年進行したことから農耕離れがすすんだことである。またはその逆に、農耕離れによって町居住が促進されたといってもよいかもしれない。ロングハウス②における家族はロングハウス長(トゥアイルマー)をつとめ、また 2005 年までは米づくりに長けていたことを誇りにして語っていたが、現在はいっさいの農耕をやめている。とくに祖母が老齢により限界にきたこと、また母のほうは妹の 3 歳の娘を預かり育てていることで手がまわらない。妹の娘を預かるというのは、妹の夫が木材伐採キャンプ地に住み込みで勤めることで、砂ぼこりの多いという環境の悪さを嫌ったことによるものである。またこれらの理由のほかにも、米はむしろ肥料や農薬などを買ってつくることを考慮したら、今日ベトナム産を買うほうが安く便利だという。実際に町で売られている値段は、ベトナム産は約 80 円/kg、サラワク産は約 110 円/kg である。

このような農耕離れによって、ロングハウス住民は米だけでなく生鮮野菜も町での購入に頼ることで、必然的な町との距離から食事は深刻な野菜不足にみまわれているといえる。イノシシ肉が地元での狩猟により比較的豊富に出回っており(ブッシュミートの売買は本来違法であるが、イノシシ肉は 300 円/kg)、米とイノシシ肉の塩漬けが多く食される。魚は今日ではそれほど多くはとれず、また大きなものがとれた場合には町で販売して現金化する。私自身も②のロングハウスに滞在中、ほぼ毎食ご飯とイノシシ肉を食べ、それ

以外のおかずは一切ない時がかなり多かった。野菜を求めてみたところ、野菜づくりをおこなうロングハウスの住民がときに余剰分を売ってくれるというが、一度もその機会にめぐまれたことはなかった。今度町へ出たときに買うから我慢してくれというが、そもそも本人らは私ほど気にしている様子はなかった。しかしお世話になった夫婦はともに 40 代後半だが、夫は痛風、妻は神経痛を患っている。夫は勤め先の木材伐採キャンプ地の食堂でそれなりの昼食を摂っているようであったが、妻は町へ出るたび病院にかよひ、痛み止めの薬を処方されるが一向によくならないという。中華新年明けには、インドネシアから著名な職能的霊媒師が町にやってくるののことを聞きつけ赴いていた。イバンの受診者はかなり殺到したといい、彼女は日を変えて 2 度診療をうけた。費用は決まっていないが、1 回につきだいたい RM30 (約 1,000 円) ほどを払えばよいと説明している。基本的に無料の行政医療サービスと比べれば大きなコストである。

これら痛風や神経痛といった疾患について、当人らは飲酒と肉食がいけないものとわきまえている。ある高年者は、かつて 10 年くらい以前までイバンは炎天下のなか農耕をいとなみ、酒と肉は年に一度くらいの祭宴のときだけ飲食したという。ただかつては川で魚が豊富にとれ、今日ではきわめて希少になってしまったエンプラウ (*Tor tambroides*) などの魚は毎日のように食べていたという。この魚は 20kg 以上もの大きになり、現在カピット町の華人商店へ持っていけばキロあたり RM330 (18,500 円) 以上の値で売れるもつとも高価な魚である(華人社会では政府関係者など要人をもてなす際に好まれて利用されると

いう)。そして今日のイバンの多くはオフィス(おもに役所など行政機関)に勤務し汗をかかず、それなのにイノシシ肉の塩づけや酒を毎晩のように食すると批判的に語っている。もともとイバンは痩身で均整のとれた体つきであることが 20 世紀の民族誌で報告されてきたが、私が見るかぎりでも、子どもも含めて若者、中年層の肥満がわずかこの数年の間に急激に増えたように思う。この社会的要因をさぐると、以上のべたように、経済の活況によって物は何でも購買にたよった生活スタイルへの変化が大きなものといえる。

経済の活況にかんしては、カピット町のにぎわいから明確に感じられる。船で町に到着するや、船着場の大掛かりな整備建設があり、町にみる人出の多さ、以前には一切みられなかった車の混雑(かつて自由駐車だったが有料チケット制になった)、食堂では以前にも増して多くのイバンの男どもが昼間からビールをあおっている。また今回の調査滞在中には、マレーシア総選挙があったことで、それにあわせ国民に国家の取り組みをアピールすべく、多くの開発プロジェクトが発表された。サラワクでは "Sarawak Corridor Plan" として、数々の巨大プロジェクト構想が明らかにされているが、とくにカピットでは巨大ダム建設と 25 万ヘクタールのオイル・パームプランテーション事業があり、それらにともなったロジスティックのためのインフラ整備が急ピッチで進行する。オイル・パームは収穫の後すぐに製油工場に持ち込まねばならないことから、泥炭地かつ丘陵の多いゆえに輸送網建設のすすまなかつた内陸地ではこれまで実現できなかつたものだった。しかしそれら困難な課題もようやく克服されてきたようである。ダムにかんしては、バレー川上流部の、

私の②の調査村のすぐ近辺につくられる。1,000 メガワットの出力を予定し、海底ケーブルをとおして半島部への電力供給および沿岸部の重工業の振興促進が策定されている。1980 年代クチン市内への電力供給をになって州内で最初につくられたバタン・アイが 100 メガワット。そして 90 年代に環境保護の観点から世界のメディアでやり玉に挙げられたバクン・ダムが 2,400 メガワット。カピット・バレーのダムはこれら 2 つについて 3 番目の大規模ダムとして位置づけられる。ちなみに日本国内では兵庫県の黒川ダムが 1,932 メガワットとして日本最大出力をほこるが、その他のほとんどは 1,000MW にも及ばない(日本では設計時の土地接収と山岳地の開拓が難点とされる所以である)。

バレー・イバンはこれまで自給自足の農耕を生業の基本としたが、1930 年代からはカピットにも木材伐採会社がいり、それ以来伐採キャンプにおける賃金労働が急速にイバンの男の間でひろまった。現在カピット管区では許可をうけた 38 の会社が操業する(2006 年の聞き取りによる)。カピット管区の木材の伐り出し量は今日サラワク全体の 70%と、バラム流域の 30%を圧倒的に上回る多数を占める。この中で一般的な学歴をもたないイバンが求めるもっとも賃金の高い職種は、木材運搬大型トラックの長距離運転手である。とくに雨天時の伐採道路運行はかなりの危険をとめない体力も極度に消耗するという。私も助手席に乗り合わせたが、でこぼこ路を高速走行にて 1 時間もいくとかなりの疲労感を覚える。この職種の給与は、かつて 1990 年代では出来高制により月 50~60 万円にもなったというが、近年は労働基準(商品認証のための基準)によって労働

時間の制限が設けられ、せいぜい 10~12 万円にしかならないという。私が今回知り合ったバレー・イバンの友人は、この仕事を 5 年間、毎月 20 万円を稼いだ後、クアラルンプールの大学へ進学し建築設計を学んでいる。今年卒業して以来なかなか良い仕事が見つからずにいたが、私が 3 月に帰国する直前にはミリ市で就職したとの連絡があった。

ところが、このような木材伐採会社での職には地元民のだれもが就けるわけではない。雇う側はより有能な経験者をもとめ、地元外から多くの人材を雇用するという。この現実をふまえ、地元住民らは今後巨大ダム建設が目鼻の先に始まったとしても、直に自分や出稼ぎ中の家族らの就労機会となるものではないことをわきまえている。

またこのような数の少ない地元での就労よりも、バレー・イバンのおもな現金獲得手段には、男たちの出稼ぎがある。それは単身で赴く場合もあれば家族をともなって数年赴く場合もある。また親族の男同士が一緒になって就業、共同暮らしというものもある。出稼ぎ先は、日本もふくめた世界中の国々であるが、州内ではおもにミリ市やピントゥル町などの沿岸の主要都市であり、それら職種は油田やガス田、また建設現場などにおける単純労働である。それら町での就業により、村社会ではなかなか獲得できない「永続安定した収入」が手にはいる。

バレーにおけるそのほかの現金収入をみると、とくに近年の傾向としては、カピット管区内では(サラワク中どこでもとのこと)違法伐採が活発におこなわれており、それに土地を貸与することで単発的に大金を稼ぐ方法がある。違法伐採者とは、おもにシブ町に拠点をおく華人の若者で、ロ

ングハウスにやってきて直接交渉をもちかけてくる。伐り出す木材 1 トンあたりおよそ 9,200 円を支払うという。これは通常の木材伐採業者が払う 1,000 円よりも圧倒的に多い。周囲 60 センチ×高さ 24 メートルの木材の重さがおよそ 3 トンであり、これ 1 本で 27,000 円が支払われる計算になる。②のロングハウスでも、住民の数名がこれをおこない、華人の若者が酒とイノシシをふるまわれているのを私は数度見かけている。若者は、短期間であるが、その家(ロングハウス内のビレックとよばれるアパート)に泊り込んで仕事をつづける。しかし周囲の冷ややかな目を浴びるのであまり大っぴらにはいられないようであった。そのうちの 1 人の話では、伐りだした木材は小型モーター付き小船でゆっくりとカピット町まで運び、そこでクレーンで大船に積み上げ河口のシブ町まで持っていくという。たしかにバレーやラジャン河をみると、そのような小船が、川の流れとともにのんびりしたスピードで多量の木材を長く連れ運び出しているのをよくみかける。華人の若者は、これまで木材会社への勤務経験などは一切なく、ただ手っ取りばやい金稼ぎのために何もノウハウを知らぬままに始めたという。なにか強力な組織が背後にあるものとも考えることもできる。

以上のように、今回の調査ではプア・クンプ染織布の制作の状況を確認することが難しかったため、むしろ利用の状況に注目せざるをえなかった。イバンはさまざまな儀礼活動の場において伝統的に染織布を利用してきたが、その伝統儀礼は 80 年代以降衰退がさげばれ、映像記録などによる救済サルヴェージ・プロジェクトがおこなわれてきた。ところが 90 年代に Masing(人類学者・サラワク州土地開発省大臣)や Kedit(人類学者)らイ

バンの在地研究者らは、イバンの伝統儀礼は近代社会のなかでその時代の変化とともに役割をかえながら、根づよく発展している実情を報告している。たとえば、祭儀の開催ではかつての首狩りの勇士であるラジャ・ブラニ *raja berani*(勇者の王)と呼ばれた男が担ったが、今日において政治やビジネスで成功をおさめる者が開催を名乗るといふ。

とくに今回の滞在日程は、出稼ぎの男たちがロングハウスへ帰郷するクリスマスや年末年始、中華新年といった祭儀開催の絶好期がかさなり、染織布の利用活発化の状況確認が期待された。そしてカピット町にて開催情報の収集を試みたが、意外にも現実には伝統の「真正なる祭儀」(8種類に分類される)の開催は皆無であることが分かった。滞在中に、前述のサルヴェージのまなざしを再考した Masing および Kedit と面会する機会にめぐまれ、それぞれ問うてみたが、ともに「衰退した」との見解であった。またその理由としておもにつぎの3つが説明された。

1. 金がかかるので(30万円以上)、個人による開催はない、
2. ラジャ・ブラニとは(「サムライ」のような)イバンにとって時代遅れのなもの、
3. 国家によって6月1~2日に制定された *gawai dayak* に代替えされ、個人の夢見にしたがった開催はない。

また地元のイバンの間では、現代のカピットにおいて Masing が数多い祭儀を開催させた人物としてよく知られている。しかし、Masing 本人の話では、彼自身は「私などは祭儀 (*gawai*) を開催するに値しない」とのべ、*gawai* ではなく規模レベルの小さな *gawa* のみを開催させてきたと

説明した。もともと Masing はバレー流域の労働者層の出自であるが、勉学にすぐれていたことでプロテスタント教会のサポートのもとにニュージーランドへ大学留学し、卒業ののち当時カピットを調査していたオーストラリア国立大学の著名な人類学者デレク・フリーマン教授にかわれて ANU へ留学し、そこで M.A および Ph.D. を取得している。ANU では内堀基光先生の2年後輩にあたり、バレー・イバンの祭儀の最高峰「真正なる祭儀」における伝統の儀礼唄について研究した。Ph.D. を修めるイバンは今日でも希少であるが、しかも80年代に ANU で人類学を修めた Masing は、工学系をめざすのが一般とされるサラワク社会で非常に変わったタイプの人物といえる。帰国後政界にはいり、観光大臣などを経て2004年7月以降からは土地開発大臣を務めるにいたっている。大規模開発プロジェクトを積極的にカピットへもたらす Masing はカピットの大衆層から絶大な人気をほこり、特有の異名 (*ensember*) を付されるなど神格化されつつある。しかしこの Masing さえも祭儀開催を表明することは簡単ではない。イバン社会において祭儀開催を自ら名乗りあげることは、神霊からのお告げにしたがうことによつてのみ成されるという。今日のイバン社会においてそれを名乗る者はいないのか。この答えは、今回のフィールドワークではあきらかにすることができなかった。

滞在中はロングハウスに居をかまえることで、祭儀開催の機会を待つことにした。①のロングハウスにおける最初の一ヶ月は年末年始と重なったことで、出稼ぎ帰郷者らをむかえた祭儀開催が期待された。しかしここではけっきょくそのような開催をみることはなかったが、1つのみ近所の

ロングハウスにおける結婚披露宴へ出席する機会をえた。そこでは、ロングハウスの通廊が細々とながら染織布で飾り立てられ、会自体は小規模であったが、近隣住民が招待されておこなわれた。ほかにも地域内の祭儀開催情報をもとめ、つねに滞在先の家主に聞いていたが、結局情報は得られずじまいに終わった。またある日、町を往復する乗り合いバンから1ヶ所のロングハウスにおいて祭儀の開催を告げるような巨大なポールが打ちたてられているのを見たが、彼はこれについて何も知らないとのことだった。この頃に気づいたのだが、祭儀はだれもが自由に参加できるわけではなく、フォーマルに招待されることによるのみ参加できるものであった。必然的に親族や知人友人などのネットワークがないと開催の機会も得られないものである。「労働階級層」に属する彼が持つネットワークには限度があったことに気づいたのだった。

この気づきを促したのは、その頃ちょうど役所の役職に就く方と親しくなり、この方の母親の葬儀があるとのことで、私はフォーマルな客人としてカピット管区ソン県にあるロングハウスでの葬儀に参加する機会をえたことにあった。氏は職務上ロングハウスを離れ町内に居住するが、ロングハウスでは父親がロングハウス長をつとめ、また氏も次期ロングハウス長といわれ住民からの厚い多くの人望をあつめていた。彼は、海外日本からの友人を連れて帰郷することは誇り高いことであるとして、非常に喜んで私を招いてくれた。ここではイバンの伝統的な葬儀が2日間にわたって大々的に開催され出稼ぎからの一時帰郷者もふくめ多数の参加者をえた。またコミュニティ外から招待され参加していた者を概観すると、プマンチ

ャやプングル、トゥアイ・ルマーなど地域の政治的リーダーたちであった。

そしてつぎにトラディショナル・エリート村といわれる②のロングハウスでの滞在についてのべる。ここは3つのロングハウスが集合し、ビレック(ロングハウスを構成するアパートメント)の数は合計90戸にのぼり、登録上の人口はおおよそ1,000人である。バレー・イバンの最上流部にあり、カピット県区でもバザーからもっとも遠隔に位置する。これは、20世紀初頭に英国人のラジャから信頼を受け、サラワク・イバンの最高首長トゥメンゴン *temenggong* を任命された首狩りの名士であったコー(1870-1956)が民族の境界線を管轄するように依頼されて居住した地であった。当時は、目先に原生林が無限にひろがる土地とあり、そういった土地を食欲にもとめていたバレー・イバンにとって最高の名誉であったといわれている。このトゥメンゴンを務めたコーの政治力によって、村にはカピット管区でははじめての公立小学校が1950年に開校されている。それ以後、無文字社会のなかでも際立って早くから教育を修得し、おおくの人材を政治、ビジネス分野へ輩出してきた。たとえば今日では、現在サラワク州それぞれの管区に設けられている11のイバンの *temenggong* のうちカピットおよび州都がおかれるクチンの2人がこの村の出身者である。またさらに20~30のロングハウスを管轄する地域リーダーであるプングル *pengulu* をみると、現在カピット県区(おおよそ関東平野とおなじ面積をもつカピット管区には現在319棟のイバンのロングハウスがある)で任命される28名のうち、イバンは15名が任命され、またこの村からも1名が選出されている。そのようにこの村は教育の高さをキャッチフレーズのように

にし、政治有力者を輩出してきたが、しかし近年では、Masing のような多くの労働者層がこぞって大学へ進学し政治分野の要職へのぼりつめていけるのも現状である。

この②調査村での 1 ヶ月の滞在中には、染織布の利用状況をうかがうおもに 4 つの儀礼開催への参加機会にめぐまれた。1 つは小学校長の定年退職祝い (*gawai terimah kasih*) であり、2 つめは厄払いの儀礼 (*gawai bul*)、3 つめは小学校の自家発電所開設祝い (*gawai mata electricity*)、そして 4 つめはサラワク州議会選挙による選挙キャンペーンである。またこの滞在中には、中華新年における学校の休暇期間中、子どもの面倒をみるために町の家に住むとのことでも私も家族についていったが、そちらでも親族が子どもの成長を祝う祭儀を開催し、私にとってプア・クンプ染織布の利用状況をうかがう好機にめぐりあえることとなった。これらの祭儀は、勇者をたたえ勇者たる個人自身が開催を名乗って大々的におこなう伝統的なものとは異なる。非常に現代的なニーズに沿う趣旨をもつものだが、かならず神霊へ感謝をつたえるためのお供え (*miring*) を準備する伝統的な儀礼手順をふまえ、そこでは代々受け継いできた家宝をふくめ多くのプア・クンプ染織布が利用されるのである。

1 つめの校長の退職祝いでは、学校の多目的スペースに PTA メンバーを中心に、お供え儀礼を昼間に済ませたあと、夜間には 200 人ほどがあつまり、ステージでは子どもによる民族ダンスやカラオケなどのエンターテインメントプログラムが夜通しおこなわれた。2 つめの厄払い儀礼では、小学校の 1 人の先生がある日夜中に突然震えだして暴れたことで、村の霊媒師 (*manang*) に

みてもらったところ、その男の肩にはサルと老人の霊が憑いているとのことだった。この小学校の地はもともと墓場であったとのことだが、近年はとくに学校敷地内で、洪水に見舞われるなど多くの凶事がつづいていたという。そこで今回 PTA メンバーが率先して、先生の家を一軒一軒まわってお祓いをおこなう儀礼を昼間の 1 日おこなった。プア・クンプはここでも、それぞれの家が持つものが持ち出され、供えものをつくる神聖なる敷き布として伝統的利用法にしたがって用いられた。

そして 3 つめの小学校の発電所開設祝いでは、これまで自家発電機にたよっていたが、24 時間電気が使えるようになったものとして、PTA メンバーを中心として昼間の 1 日おこなった。またこれは、毎年同時期におこなうというトゥメンゴン・コーの墓参りとあわせておこなわれた。女性らの参加が多かったが、皆かなり酒をあおって酔っ払い、お祭りの雰囲気がとても強く感じられた。

4 つめはサラワク州議会選挙による選挙キャンペーンにおける懇話会であった。今回のラジャン上流選挙区は、与党の国民戦線 (BN) 候補者への対抗馬として、当ロングハウスから 1 人の無所属候補者は出馬した。この無所属候補者は、クチンでビジネスをいとなみ、また土地開発大臣の Masing が党首を務める与政党サラワク人民党 (Parti Rakyat Sarawak) の内紛していたもう一方の側の副党首を務めていた人物である。今回の出馬にあたっては、党の支持が得られず無所属出馬となっていた。カピットの草の根に人気を博す Masing 側と、それに対して政治有力者をこれまで多く輩出してきたトラディショナル・エリート村出身者とあって、私は非常に興味深く結果を見守ったが与党候補者の勝利におわっ

ている。この BN 候補者のキャンペーンでは、②のロングハウスにも BN 関係者がこぞってヘリコプターで入村した。イバンの伝統的な入村の儀式が執行され、数枚のプア・クンプ染織布が装飾用に、また供え物おきの敷布としてもちいられていた。私がかつて聞いていたのは、選挙キャンペーン時にはロングハウスの女性がこぞって無数のプア・クンプを壁に飾り立て、候補者が帰り際に気前よく全部買って帰るというものだった。しかし今回はそういった雰囲気はなく、ただ現金 RM7,000(約 23 万円)がロングハウスの壁のペンキを塗りなおすようにとの名目で置かれていった。そして無所属として名乗り出た地元候補者のキャンペーンは、あいにく家の家族が町へ行くとのことで、私も仕方なく付いて行かねばならず見逃している。この後私はクチン市へもどり帰国の途についた。

そして本報告では、もう 1 つ、私が参加した中華新年期に町でおこなわれた、比較的規模の大きな祭儀の開催についてふれたい。これはロングハウスではなく、町の一軒の富裕者宅でおこなわれたものである。家の主は、②ロングハウス出身で現在測量調査局に勤務し、かつて国共戦では兵役に就き敵方 3 名を射止めたことで国家勲章を受けたという。このことから、本人いわく、少し茶目っ気を混じえて、彼自身が *rajah berani* 「勇者の王」であるという。今回の祭宴の開催はこの方の息子である。息子は 40 歳代と若い、クチンでビジネスをいとなみ、政界との深いつながりをもつ。土地開発省の Masing 大臣とも緊密な関係を持ち、カピットのインフラ整備事業の目玉の 1 つともいえる架橋工事を落札し、ちょうどその建設に着手した時期にあった。しかし祭宴開催

の目的は、彼の子どもたちの成長祝いであると説明した。長男がちょうど大学入試を終えて結果待ちの状況にあり、父親として焦燥の念にもかられた開催だったかもしれない。また私が 2003 年に②のロングハウスを訪れた際にも、やはり彼がクチンから子どもら家族を連れて帰郷し「成長祝い」をおこなっている。これら開催する祭宴について、つねに子どものもと説明し、けっして伝統の「真正なる祭宴」ではないとしているが、招待される客数は比較的多く、一晩だけの開催ではあるが個人が開催するには振る舞う酒の量からも大きな規模のものといえる。今回の町における開催では、親類を中心に、社会上流層のメンバーが顔ぶれだった。また中華新年の休暇期とあって、出稼ぎに出て一時帰郷している多くの若者らも参加していた。ここでは新旧とり混ぜた多くのプア・クンプがみられ、床にすわる子どもたちを包み、儀礼唄がうたわれて儀礼は進行した。職能的儀礼唄のうたい手は②ロングハウスの住人である老齢の男性が招かれていたが、あいにく歯がなく何を言っているのか聞き取れなかったと、参加者からの批評をのちに聞いた。消えゆく伝統文化の一端をしめしたのもでもあった。そして儀礼の後は酒と食事がふるまわれ、また庭では、手配されたプロの電子オルガン生演奏によるカラオケが深夜遅くまで繰り広げられた。ここで私が気になったのは、主催者である彼自身は、つねに退屈そうな面立ちでおり、酒ものまずカラオケも歌わず、陽気な浮かれ騒ぎにまったく溶け込むことのない人物であった。

イバンは祭儀の開催だけでなく、人間関係における様ざまな様相において謙虚さを美德とし、自らおごりたがぶって傲慢に威をふるうことは忌

むべきものとされる。たとえば、本報告の冒頭へのべたように機織りはロングハウス社会における女性の伝統的威信活動としておこなわれてきたが、神霊から新たなデザインの新案を承認された織り手など評判の織り手は、地域内において異名 (*ensembar*) をもって尊重されてきた。このような場合においても、自らそれを誇ることを美德とはしない。こういった理由から、今日政治的権威を獲得した *Masing* のような人物でさえ「私などは祭儀開催を名乗るにまだ値しない」とのべるのである。

ただ今回はくわしい調査ができなかったが、②のロングハウス出身者であり、現在カピット・イバンの最高首長 *temenggong* (Paramount Chief) を務める *Kanyan* 氏 (1942 年生) はすこし事情がことなるようである。氏は、サラワク・イバンの初代最高首長であった *Koh* の直属の息子にあたり (*Koh* は生涯 8 度結婚したといわれる)、現代カピット社会において最も高名なイバンといわれる。連邦政府サラワク情勢大臣の補佐官 (1970~)、そしてマレーシア第 2 代目首相 *Tun Razak* 政権下の副首相でのちに第 3 代目首相となった *Tun Hussein Onn* の補佐官を務めるなど、サラワク政治の中軸リーダーとして 32 年間たずさわった。その後政界を退くが、2007 年にはビジネスマンである長男の *Daniel Jubang* がサラワク州首相の補佐官 (*Political Secretary*) として任命されるにいたっている。*Kanyan* 氏の父である *Koh* は生涯 20 回以上にわたって祭儀を開催させたといわれ、また *Kanyan* 氏もこれまで数度開催させた経歴をもつ。私は氏に滞在の最後のほうで一度だけ会う機会にめぐまれたが、非常に気さくではあるが、イバンの最高首長であ

ることなど自らの様々な肩書きを強調して話すなど、少し一般的なイバンとは異なった様子をもつ。こういった自らの権威を誇る事が許されるのは、労働者層 (*anembiak*) とは異なり、イバン社会におけるエリート層の特権なのかもしれない。今後ともさらに長期のフィールドワークを実施してあきらかにしてゆきたい。